



仮設足場より「大祖堂」屋根を望む。建物正面側には以前から使われていた瓦が再利用されている。上空には、解体中の素屋根（建物を雨風から守るとともに、全天候で作業をするために建物全体を覆う仮の屋根）の骨組みが見え、スケールの大きさがうかがえる。

能登半島地震からの復興

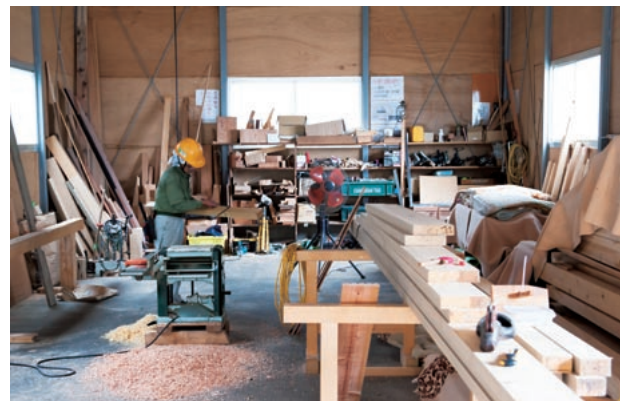
能登半島の中腹に位置する「大本山總持寺祖院」は今から約八〇〇年前に創建、一八九八（明治三十二）年の大火で焼失するまで、曹洞宗の修行寺として栄えていた。大火の折に本山は神奈川県横浜市鶴見に移されたが、焼失を免れた伝燈院、経蔵、慈雲閣などが境内に残り、地元では「能登の御本山」として親しまれている。今回取材した「大祖堂」は一九一〇（明治四十三）年に建設された境内最大施設であり、高さ二〇㍎、建築面積八八〇平方㍎を誇る国登録有形文化財でもある。

六年前の能登半島地震によるこの地域の建物被害は全壊、半壊をあわせて一、五〇〇棟を超えた。「大本山總持寺祖院」も例外ではなく、敷地内にある三〇棟もの建造物に被害が及んだ。「地震直後は地割れが起きて、山門側に地盤が滑落、柱は傾き、壁は崩落、瓦も脱落し床はでこぼこ波を打っていました。目視でわかるくらい建物の多くは傾いている状況でした」と振り返るのは、現場を統括する磯見所長だ。市内の復旧を最優先にしたことで、地震発生から六年を過ぎた今でも修復作業は継続している。それでも年内にはすべての工程が完了し、仏具の復旧が終われば「大祖堂」は七年ぶりに本来の姿を現す。現在は建物を覆っていた素屋根の解体と内壁の地下工事が行なわれている。

社寺建築の修復工事

「地震で傾いた建物を水平に戻しつつ、沈下した地盤を補強する作業にもっとも苦労しましたね」と言いながら、磯見所長がその工程を説明してくれた。この現場では「半解体修理」という技法で工事が進められている。柱などの主構造は解体せずに、破損した屋根や壁を修復していくというものだ。

まず既存の屋根や壁はそのままに床組みを解体。続いて、一〇〇㍎の油圧ジャッキを四五個使用、建物を地上から約一㍎持ち上げ空間をつくる。建物を持ち上げるためにはできるだけ軽



現場付近の木材加工場。ほとんどの木部材は、ここで加工されている。作業のほとんどは手加工のため、大きな機材は置かれていない。



建物を地面から約1m持ち上げた様子。床組みの下には井桁状に鉄骨が組まれており、それをジャッキが支えている。（提供：松井建設株）

工事概要

発注者：大本山總持寺祖院震災復興委員会
設計・監理：株式会社社文化財工学研究所
施工者：松井建設株式会社北陸支店
工期：平成21年12月1日～平成26年1月31日（予定）



宮大工の精神が 社寺建築を 未来へ伝承する

大本山總持寺祖院震災復興事業・ 大祖堂保存修理工事

今から六年前の平成十九年三月二十五日、能登半島地震が発生した。最大震度六強を記録した輪島市に今回の現場「大本山總持寺祖院」はある。地震では敷地内にあるすべての建造物が被害を受けたが、その傷跡はまだ癒えていない。その中の一つ「大祖堂」再建に携わる松井建設株・磯見所長に取材した。

くした方が安全のように思えるが、地盤や基礎を補強する約一年の間に雨風で柱などが痛まないうちに屋根や壁を残しているという。地盤の補強として地中には約七㍎の長さで、二五五本の鋼管杭が打ち込まれている。「床下の空間は約一㍎しかありませんので、直径の異なる二種類の鋼管杭を一㍎刻みに人力で運搬し、建物の自重をジャッキの反力として利用する圧入工法で打設していきました」。その後、基礎の補強として新たな基礎スラブを打設、礎石を元の位置に戻していった。「創建時と同じ場所へ柱を戻す為に、建物を下ろす際には三次元測量器を利用してミリ単位の精度で位置を調整しました」。





「大祖堂」正面入り口。立体的な彫刻が軒下に配置されている。壮大な外観を拝める日も近い。

た」。現場では図面通りの品質が確保されているか、加工された木材を隅々まで確認したそう
だ。そうした姿勢が会社に認められ、以降は社
寺建築一筋となった。所長になった今でも「職
人さんと話すときは、知った振りをしないこと
が大切です。社寺建築には一つとして同じ建物



補完された木材の様子。部材の長さを後世へ伝える為に端部を切り落とさずに、新しい木材を補完している。新旧の木目も揃える事で、長い年月をかけて馴染んでいく。

創建当時の形を次世代に伝える手仕事

屋根は社寺建築の顔とも言える。「社寺建築
の現場では調査という工程があります。解体し

柱は最大で三〇ミリの曲がりがあり、ナイロンの
吊り具とチェーンブロックを用い、位置を微調
整する作業は非常に苦労したという。「今回屋
根瓦も修復していますが、瓦の下地は土居葺き
でした。いまでいう防水紙の役割ですね。ただ
修復の際には土居葺きだけでなく防水紙も使っ
ています」。伝統的な技術と近代的な技術を常
に融合させながら修復工事は進められている。

ながら建物を調べて、屋根の形状や垂木の小口
につく金物などの現寸図をおこしていきます」。
多い時には工程の四割が調査にあてられる。木
造の屋根は乾燥収縮や経年変化により、その勾
配や反り具合が創建当時の形と異なっているそ
うだ。現寸図を書きおこし、棟梁らと本来もつ
ていた稜線に想いを馳せながら修復する形を決
めていく。「そのこだわりはシャープの芯一
本分だったりしますが、これこそが社寺建築の
醍醐味ですね」と磯見所長。

もう一つ受け継がれるものがある、素材だ。
補修に関しては、木組みの形状や使われている
釘からいつ、何回手を加えられたかを探り、そ
の加工技術を踏襲して新たな加工を施すそう
だ。また部材の長さや厚みが次の担い手に伝わるよ
う完全に切落とすようなことはせず、新しい木
材を補完していく。左官工事では解体した壁の
土を新しい材料に混ぜて使うそう
だ。磯見所長は実際の土壁の前に「土塗り壁は四種類の下塗
りの後、上塗りで仕上げます。そうすることで、
ひび割れ防止に役立ちます」。社寺建築を「修
復」ということは、創建当時の姿に戻すこ
とであり、数百年先を見据え、その建物で使わ
れている技術や素材を伝承することでもある。

社寺建築にかける想い

松井建設株式の創業は約四百年前に遡る。加賀
藩二代藩主前田利長公の命により越中守山城の

はありません。その都度勉強ですね」と実直だ。
現場で課題があると、他の社寺建築から解決す
るためのヒントを探そうだ。「建物は普通正
面からしか見えないと思いますが、見上げたり、
建物の後ろにまわってみたり、しゃがんで床下
を覗いたり、いろいろな角度から建物を観察
します。毎回違う発見がありますね」と楽しそ
うに話してくれた。社寺建築をこよなく愛する
磯見所長は今後も社寺現場で頑張ることに違
い。



右／「焼印」は新たに使用する木材に押される。これにより改修時期を後世に伝える。
左上／解体時、既存建具や床板一枚ごとに「番付」と呼ばれる札が付けられる。写真は
建具に貼られた「番付」。これにより、どこで使われていた部材かわかる。
左下／現場で使用する仕口、継ぎ手形状の検討に使われた原寸大模型。



Q あなたがこの現場で発見したことは何ですか？

A 社寺建築の修復に携わるときは、
必ずその社寺が所蔵している過
去の建築記録を確認します。そこには
当時使われた構法や道具の種類が記さ
れ、棟梁はもちろん、工事関係者の名
前がすべて記録されているからです。
この現場でも建設中の写真などが残っ
ており、修復工事の際にたいへん役立
ちました。同じように修復工事が完了
した折には、私たちのことも資料とし

て所蔵されます。数百年前の先人と肩
を並べるようで、非常に誇らしいです
ね。木造建築は丁寧に修理し続ければ、
数百年使い続けられることを改めて感
じています。日本の建築文化は本当に
すばらしいです。

「大祖堂」の後にも修復工事は続き
ます。多くの方に1日でも早く再びこ
の寺の本来の姿をお見せできるように
今後も尽力していきます。



松井建設株式会社 北陸支店
大本山總持寺祖院震災復興事業
・大祖堂保存修理工事 作業所長

磯見浩之
Hiroyuki Isomi

普請に従事、それ以後、宮大工の精神を継承し、
社寺建築の新築、改修、保存に従事してきた。
今ではその数二千件以上。社寺建築に携わりた
いと思って入社する社員も多いが、だれもがそ
うなれる訳ではない。磯見所長は一四年前に携
わった現場で転機があった。「一つの現場で、継
手仕口の図面を二〇〇枚書いたことがあります。
もちろん本も参考にしましたが、昔からその地
域に伝わる特有の寸法や形状があったので、連
日現場の棟梁と打合せをしながら書き上げまし



上／土塗り壁の調査写真。5つの段階
を経て壁を仕上げている。左から小
舞、荒壁、斑直し、中塗り、漆喰上塗
りの順。（提供：松井建設株）
左／斑直しに使用される土を練ってい
る様子。藁と混ぜた後、使用する。